

草の根まんだら

題字 山折哲雄

2011年7月1日 発行
 発行 近江八幡商工会議所
 会頭 秋村田津夫
 所在地 滋賀県近江八幡市桜宮町231-2
 発行部数 30,000部
 TEL 0748-33-4141

山折哲雄氏 講演録
 演題 「生き残り戦略か、無常戦略か」
 開催日 二〇一一年五月十五日
 場所 近江八幡商工会議所



【挨拶】
 おはようございます。
 私のふるさととは、岩手県の花巻です。近くに宮沢賢治さんの生家がございます。中学校と高等学校はこの花巻で過ごしました。大学は仙台で学びました。

【地獄と賽の河原】
 大災害で被害を受けた三陸地域は岩手県から宮城県・福島県にかけて広がっています。先月の（二〇一一年）四月十六、十八日の三日間現地にいつてきました。伊丹から飛行機で山形空港へ行きまして、山形から車で仙台へ出て、東松島、花巻、そして三陸海岸へと北上し、気仙沼まで参りました。一面の破壊と瓦礫の山を前に、本当に言葉が飲みこみましました。「地獄」という言葉が自然な形で出てきました。そして、もう一つは「賽の河原」です。現実に「地獄」も「賽の河原」も存在するのだな、ということを実感しました。

しかし、その地獄には全く仏さんの存在を感じることができません。賽の河原にも地藏菩薩が現れるような、そういうお地藏さまの身じろぎもほとんど感じることができませんでした。無惨な、『無情』な状況でした。自然の恐ろしさとは、これほどのものかと思ったのです。

【自然の二面性】
 これまでによく、自然の恐ろしさとは人間の

創った文明を粉みじんに打ち砕く、ということ言う人がいました。また、その恐るべき自然は文明を創った人間に対して牙を向いて復讐するということにおっしゃる人もおりました。

私が新しく感じましたのは、そういうことももちろんそののですが、それよりも「自然が自然を破壊する」ということです。自然の力が、自然そのものを根底から破壊していると、そう思いました。そう思ったときに、自然の本当の恐ろしさみたいなのが実感として迫ってくるようでした。

ちょうど私が現地へ行った三日間は晴れました。太平洋を見るとどこまでも美しい大海原が広がっており、所々に鳥影が見えました。それが太陽の光線を照り返し美しく凜いだ海の姿と見事に調和しており、ほんとうに美しく見えました。振り返って瓦礫の山の彼方に目をやると、これまた美しい山々の稜線が見えます。残酷な自然の美しさを感じたのであります。

それをじーっと見ているうちに、この災害にあわれた方々も結局はこの美しい自然によって癒される以外にないのだなと思ったのです。このような自然の持っている力の二面性を、今回これほど強く実感させられたことはなかったと思います。

無数のご遺体が山野に投げ出されていきました。最近、小田原に行つて聞かされたのですが、そのご遺体が流れ流れて房総から相模湾の定置網に引っかかっているそうです。そのほとんどがマスクミには報道されていません。そういう無数のご遺体が失われている状態の中で、ご遺族のお気持ちはどうなっているのか、どうやって自らの心を慰めることができるのでしょうか。結局、この美しい自然が最終的にその慰めの母体になるしかないのではないのかと思ひました。もう仏さんや地藏菩薩だけでは、間に合わないのかもしれない。そういう点では、宗教そのものの危機であるかもしれない。

【美しい山野に静まる魂の詩】
 自然に思い浮かんだ詩があります。万葉集の大伴家持の和歌であります。

海行かば水漬く屍
 山行かば草生す屍

大君の辺にこそ死なめ
 かへりみはせじ

山野に屍が投げ出されています。この歌は戦前から戦中にかけて、我々は歌つて参りました。戦後は、「大君の辺にこそ死なめ」という言葉がタブーになり、ほとんど誰も歌わなくなつてしまいました。私も戦後は歌いませんでした。

しかし、不思議なことに、あの詩がしみじみとのど元を突き上げてきたのです。あの通りではないのかと思つたわけです。万葉人はあの和歌を歌うことで死者を慰め、自らを慰めたのだらうと思ひました。そう思つたときに、そうであるに違いない、そうであつたに違いないと確信しました。なぜならば、この歌を作つた万葉人・大伴家持は死者の魂が自然の中に鎮まつていくという前提にしてこの『屍』の歌を作つていたのであるからです。

詩の中では『屍』という言葉しかでてきていません。しかし、それをうたつた万葉人は、死者の魂が遺体から抜け出て美しい山野に鎮まることを疑わなかつたのだと思ひます。だからこそ、言葉の上で「水漬く屍」「草生す屍」と言つたのだと思ひます。

我々はその屍という言葉だけをあの詩の中に読み込んでいます。私自身もそうでした。これでは死者たちは救われようがありません。あの詩が生きてきた歴史が浮かんでくるわけがありません。これは、魂の存在を信じていることができない現代人の悲劇です。

時間が経てばあの被災地における方々は、亡くなつた方々の遺体から魂が抜け出て、あの美しい山野に鎮まつていくと思ふことで、自らを慰め、自らを癒していくのだと思ひます。

【魂を送る風習の風化】

お金や物の支援はもちろん大事です。ボランティア等々の支援ももちろん大事だと思ひます。しかし、私が現地で感じたことは、もう一つもつと大切なことがあるのではないかとこのことでした。

ちやうど、石巻に行つたときでした。やはり、惨害の状況がつづいていました。田んぼまで水に浸かり、散々たる有様でした。ちやうど、市の中心部分、海岸に沿つて大きな大きなサッカー場がありました。そこは、ほとんど全域掘り返されて、土葬のための仮設の場所にされていきました。穴は掘り返されて土が積まれておりました。ざつと勘定して千体以上の遺体を埋葬できる場所を作つたようです。その五分の一ほどの二百体くらいは遺体が埋められていました。身元がわかつた方、わからない方さままでしたけれどその上に番号札が立てられていました。テレビでご覧

になつたことがある方もいると思ひます。

そのサッカー場における土葬場が、五百番台でした。その前の一つ一つの『お墓』の前には、花が添えられていたり、ペットボトルの水が置かれていたり、お線香が置かれていたりしました。しかし、それらが添えられていないものもほうが多い状況でした。

一組だけ若いご夫婦が、ある場所で佇んで手を合わせ拝んでいました。多くの方々はとりあえずは土葬にしておいて、いずれときが経てば、火葬にして改葬し、遺骨にするつもりなのでしょう。そうしない限り本当に弔いをしたという気持ちになれないからなのでしょう。

ご遺族の方々の気持ちが非常に揺れている。白骨を手元に取り戻したら、本当に気持ちが安定するのでしょうか。それだけでいいのか。また先ほどの問題がもち上がつてくるわけです。犠牲によつて亡くなつた方の魂の存在を信じられるのか、信ずることができないのか、という問題です。

あの瓦礫の中に写真を探し続ける人々が多かつたのですがそれは、テレビの映像でも知らされてくることです。我が国におきましては、亡くなつた方々、もしくは非業の最後を遂げた方々の写真をなんとしても手元に取つておきたい、という願望が非常に強いのです。今私たちの社会はどんな葬儀においても、告別式においても、偲ぶ会においても会場に入つていくと亡くなつた方の写真が正面に高く掲げられています。それに對してご遺体そのものは多くの場合、花に埋もれていてよく見えない。参列者は写真に向かつて別

れを告げ、悲しみの涙を流し、手を合わせます。ほとんど写真葬になつてしまつていくという感じがあります。死者の魂を送るという風習がほとんど風化してしまつています。我々の現実の世界では、それが普通の現象のように思ひますけれども、このたびのようなあの悲惨な状況の中で、果してそれだけで耐えることができるのだろうか。日本人の気持ちとしてですね。

改めて、我々の日常生活の重要な問題が、もちろん私自身も含めてですが、顧みられるような思いがしました。

【被災者の顔】

そういう問題を現地に行つて痛感したのですが、それはそれとして、今回においても被災者の顔が実に穏やかで平和な顔をされているというところに胸を突かれました。皆様方も同じであらうと思ひます。冷静な行動、沈着な生活態度、協力的な姿勢、我慢強い姿、今回はこれが世界から注目を浴びたわけですね。ああ、日本人つてすごいんだ。なんとなく、自信と誇りを与えられたというような気がする、というような話がメディアの上では紹介されておりました。しか

し私は、それは今回がはじめてではないとずっと前から思つていました。阪神淡路大震災のときもそうでした。被災者の方々の顔は実に穏やかでした。中越地震のときもそうでした。これにはなにかあるに違いない、単なる偶然ではない、そう思つた。日本人の自然観であるとか、世界観、あるいは宗教心と深いところと繋がりがあつたことかなのではないのかと漠然とそう思つたのです。

ちやうど、阪神淡路大震災が発生した直後だつたと思ひますが、アメリカでハリケーンの大災害が起きました。このとき、テレビに映し出される被災地の方々の表情は、これがすごい怒りと悲しみと苦しみに満ち満ちた表情を全面的に表す形でテレビに映されていきました。それは、私たちの同胞たちが示す表情とはまるで違つていた。そういう印象を受けた方は多かつたのではないのでしょうか。

やがて、スマトラ島沖の大地震大津波が発生しましたが、現地の人たちの表情は苦しさと悲しみの表情にみちみちていた。トルコの大地震、中国の大地震が相次いだときも、そういうときに映し出される顔、顔、顔が全てこの怒りと悲しみと苦しみに歪み、泣き叫んでいました。この対称性は一体なんなのだろうか、だんだん思うようになってきました。これはもはや偶然ではない。我々自身のアイデンティティというものの根源を知るために、考えなければならぬことではないのかと思つたのです。

【日本の自然とヨーロッパの自然】

そのとき真つ先に思ひ出した自然科学者の名前があります。それが「寺田寅彦」という人物であります。高知県高知市出身、旧制五校（第五高等学校）で夏目漱石につき、後に上京して東京大学の物理学科に入り、漱石の門に出入りするようになります。そして、地震学を研究する、その先駆けとなつた自然科学者です。寅彦の文章というのは漱石ゆずりの文学的な香りに満ちています。寺田寅彦随筆集は未だに岩波文庫のベストセラーです。日本人の心の琴線に触れる文章を書き続けました。

その寺田寅彦が昭和十年十二月に亡くなるのですけれども、その亡くなる四ヶ月前のちやうど八月だつたと思ひますが、『日本人の自然観』というすばらしい論文を書いている。関東大震災から十年しか経っていません。

このなかで、寺田寅彦は非常に面白い示唆に富むことをいつているのですが、そのうち二、三の問題をご紹介したいと思います。一つは、日本列島の自然というものをヨーロッパの自然と比較しているところです。彼はヨーロッパに留学しています。そこから引き出した結論という

のが、やっぱり鋭いものでした。ヨーロッパも言っても、特に彼の考えているのはフランスやイギリスが中心となる西ヨーロッパです。この西ヨーロッパの自然というのとはとても安定している。それは、地震がないからだといっている。今日でも世界の地震マップというのがありまして、前の京都大学の総長をやられた尾池和夫さんから地震マップを頂いたことがあります。そのマップを見ますと、世界でも珍しくイギリスとフランスは地震の空白地帯です。もちろん、全くないというわけではないのですが、ほとんど地震の揺れを感じない地域。そのことを昭和十年の段階で、日本列島の自然と比較する形で寺田寅彦が指摘しています。自然が安定しているから、客観的に自然現象というものを観察することができた。安定したデータをとり、積み重ねていくことができる。

その結果、そのデータと経験に基づき自然を活用したり利用したり、場合によって克服したりすることができるようになります。自然に対して人間が攻撃的に関わる。そういうことができるようになったのは、まさしく自然の安定性によるのだと言っているわけです。

それに対して、日本の自然というのはものすごく不安定です。太古の昔から地震と付き合わざるを得ない、そういう地震列島の自然だったという。

今回の福島原発の問題が起きて、それまで私は正確なことは知らなかったのですが、フランスは電力の八十%を原子力に頼っている。そして原発の数、五十九基です。日本の原発の数は五十四基あり、フランスと同じくらい作っているわけです。こんどの危機的な状況の中で、フランスのサルコジ大統領が日本に来て、さまざまなアドバイスをくれました。技術援助もしてくれました。それは誠にありがたいことなのですけれども、しかしなぜ自然が安定しているフランスと同じような原子力政策を日本の国家の政策として取りあげたのでしょうか。そこが問題だと思つたのです。

自然の捉え方がこんなにも対照的に違っています。寺田寅彦の学問とその地震学者としての経験を、その後の日本の科学技術が必ずしも継承しなかったのではないのかと疑問に思っています。

【天然の無常感】

それから、もう一つ重要なことを寺田寅彦は言っています。我が国では人々は、太古の昔からこの非常に不安定な地震現象というものとずつつきあつてきた。だからひとたび地震が起きれば、あるいは地震に匹敵するような自然災害が起きた場合、この列島に住む人たちはその自然の猛威に対し頭を垂れ、抵抗することを諦めてきた。膝を屈して、その自然のあり方からできるだけのことを学び自分たちの生活をどう防衛するか、そのための知恵と技術を積み重ねてきたと言っています。これはすごいことではあるまいか。そうしてできた日本人の学問、自然科学というものを大抵だといっている。それは決して攻撃的なものではない、むしろ対症療法的性格を持つているということになります。もちろん自然科学というのは普遍的な概念です。西のヨーロッパ、東のアジアで違はずがありません。一十一二です。しかし、その上でなおかつ、自然科学のそのような普遍性の上に、あるいはそのベースの上に、それぞれの地域、風土、民族性に基づいた性格が植え込まれている。そういう点では、西ヨーロッパのものと日本のものではおのずから性格が違つてくるという。

このように認識が今の子どもたちに対する科学教育の中で、きちんと教えられているのか不安になります。おそらく、そんな教育はほとんどされていないと私は思うのです。こうしてそのような不安定な自然との付き合いの中で、日本人の意識や感覚の中に『天然の無常感』という意識が育まれるようになったのだと寺田寅彦はいうのです。『無常』というのは「ああ無情」の『無情』ではありません。「常が無い」という無常です。常ならぬものとしての無常。ひとたび自然が怒り出すとき、それに対して抵抗することは人間にはできない。そのような自然とは共存する以外にない。そこから無常の感覚が生まれる。それは作ろうとしてきたものではありません。自然に出来上らざるを得なかった感覚です。そういう感覚だから『天然の』といっているわけです。

この一節を読んだとき、私は驚きました。地震学という学問をずっと続けてきた自然科学者が、宗教的真実ともいえる『無常』という認識に到達したということ。我々にとつて、戦後の教育というものはどうだったのか。科学と宗教を水と油の関係とらえていたのではないか、それが大前提だったような気がします。しかし、寺田寅彦によると科学的な認識と宗教的な信念とは必ずしも矛盾しない、ということになります。

これは一つの英知ではありませんか。日本人が創り上げた学問的な知恵ではなかったでしょうか。どうも、無常という日本人には評判がよくありません。特に、知識人たちはこの言葉を嫌います。あの阪神淡路大震災のときも私はいろんなメディアからコメントを求められました。この無常という問題を持ち出しますとほとんどのジャーナリストがある種の抵抗感を示しました。今回もある日本を代表する新聞社から文章を頼まれ、『無常』ということについて書きました。そうしたら、被災地における被災者の方に、そしてこの惨害を前にして「無常だよ」という言葉はとても差し出せない、記事にすることもできないということ、いったんはボツになりました。「またか」と思いました。日本のジャーナリズムの無常嫌い、日本の知識人の無常嫌い、に対して「またか」と思つたのですが、さすがに今度はそれが一晩でひっくり返つた。本社において撤回されて、それが採用され、私の文章は「無常」というタイトルをつけたままで全国に流されました。一晩でひっくり返つたことは、今度の災害の恐ろしさやすごさがその背後にあつたからだと思ひます。阪神淡路大震災のときには、その壁を破ることができなかったけれども、今度の災害は無常という言葉を通して、認識が少しは浸透した。ようやく寺田寅彦の考え方が、日本の自然観とはこういうものだという文脈の中で、少しずつ論じられるようになった、そのような気がします。しかし、これがいつまで続きますでしょうか。

【無常三原則】

日本列島において太古の昔から自然な形で出来上がったこの『天然の無常感』のうえに、六世紀になつて日本に仏教が伝えられて、お釈迦さまの説く無常という考え方が積み上げられました。では仏教でいう無常とは何なのか、私はそこに三つの原則があると思つています。それは、この地上にあるもので永遠なものはない、形あるものは必ず壊れる、人は生きてやがて必ず死ぬ、これが無常の三原則です。お釈迦さんはこれをセンチメンタルにいつたのではなく、客観的な哲学を説くようにしてそれをいつたのです。この認識はとても乾いています。世界のどんな人間でもこの無常三原則を否定できるものはないと思ひます。なぜなら、それは客観的な事実だからです。

ところが難しいというが、世界にはこの客観的な事実を受け入れる文明と、受け入れない文明があるということです。我々はそのことを受け入れる文明の中で生きてきました。つまり仏教文明圏の中で生きてきたので、無常三原則を受け入れてきたわけです。老子や荘子の老荘思想というのもこの無常三原則と関係が深い。アジア的な思想戦路がそこにあつたといつてもいい。

ところがこれを、アングロサクソン文明は決して受け入れませんでした。無常三原則の客観的事実、これは認めるほかはなかつたと思ひますが、しかしこのことを自分たちの生活のなかに取り入れようとはしません。社会のあり方の中にそのベースとして受け入れようとしなかつた。ユダヤキリスト教文明というのはそういう性格を持っています。アングロサクソンはもちろんです。このところが難しいのです。面倒なのです。いろんな国際会議の中で、最終的に議論を煮詰めていくとその点でどうしても衝突してしまします。それは政治交渉でも、経済交渉でもそうです。私なんかでも宗教や文化や芸術のそういう国際会議に出席することがよくありますけれども、一週間も論じつづけて、行き着く先が結局はそこで行き止まりになつてしまふ。「ああ、やっぱりここでだめだな」と思うことになる、なぜそうなのだろうか、ということ。これからは考えないといけません。

【首から上の価値観と首から下の意識】

ともかく、寺田寅彦のいう天然の無常感の上には仏教の無常三原則が積み重なつて、それ以降千年です。我々の無常感覚というのは半端なものではありません。首からはヨーロッパ文明のものの考え方、価値観の影響を受けておりますが、いざ危機的な状況が起こつたとなると、ヨーロッパ的な知性とか論理だけでそれに対応なんてできるわけがない。首から下の深層に流れている感覚や意識が間違いなく浮かび上がつてくるはず。これはまず間違いありません。こんどの大災害と原発の危機についても、アングロサクソン文明の知恵だけではたして、それを乗り越えることができるのかどうか。

寺田寅彦は、仏教の説いた無常という考え方をベースにものを考えていた。このライフスタイルは、やはりこれからの日本人にも大きな意味をもつのではないかと、私はそう思っています。ところがもう一つ、現実の世界、われわれを取り巻くグローバルゼーションの世界のなかで考えますと、否応なく私たちが直面しているのがアングロサクソン文明の価値観です。しかも、その価値観の中に私たちがすっぽりと包み込まれています。日本が近代化に成功したのもまさにそのおかげだつたわけであります。

【生き残り戦略と無常戦略】

そのアングロサクソン文明、ユダヤキリスト教文明というものの根本にある考え方とは何なののでしょうか。無常に対してどういう考え方をそこから引き出すことができるか。彼らの基本的な人生観になつていくのが『生き残り』という考え方なのではないでしょうか。地上に危機的な状況が起きた場合、何としてでも生き残りたい、たとえ大量の犠牲を払つても生き残りたい、生き残らなければならぬ。この路線

をずっと追求してきたのがユダヤキリスト教文明であり、アングロサクソン文明だつたと思ひます。その生き残りの戦略によつて、イギリス、アメリカ、フランスを中心とする西洋文明というものがずっと歴史を勝ち抜いてきたのです。その傘の下で我々もまた近代化に成功したので。今さら、そのアングロサクソン文明の生き残りの生き方、つまりは戦略を放棄することなどできるわけがありません。辛いところ。私はいま、人類史の中で二つの生き方、すなわち「生き残り戦略」と「無常戦略」という二つのライフスタイルが、二千年も三千年も前からこの地球上で説き続けられてきたのだということ。それを言つてみたのです。それがいかに強力な考え方であつたのかということについて、代表的な二つの物語が語り伝えられてきました。次にその問題に入つていきたいと思います。

【ノアの方舟の物語】

先ほど、ヨーロッパ文明というのは無常三原則を絶対に受け入れられないだろうということ。その考え方の出発点をなす大きな物語があります。それは、旧約聖書のはじめにある創世記のなかで書かれている「ノアの方舟」という物語です。

これは次のような話です。地上の人間たちが神の言うことを聞かずに悪いことばかりやつているので、神は地上に大洪水をおこしてその人間たちを全員殺そうとする。ただ、ノアの一族だけが神の許しを得て、生き延びることを保証されます。神との約束を守る、つまり神との契約に基づいて生活を立て直していくということで、ノア一族だけが船をつくり、その中に食料と動物とそういう人類が生きていくために必要な最小限のものを詰め込んで生き延びる準備をする。間もなく大洪水が起こり、ノアの一族だけが助かりました。

これは生き残りの物語です。そのおかげで、我々人類は今日、生を享受することができているのだ。しかしそのためには、多くの人間が犠牲になりました。これを別の言葉でいいますと、旧約聖書冒頭に登場する物語というのは、生き残りのための救命ボートと、犠牲の物語なのです。

生き残るものと死滅するものが、選別される物語とも言えます。生き残るためには、犠牲は必然であるという思想と言つてもいい。以後、この思想が二千年、三千年の歴史を貫いてヨーロッパ文明の骨格を創り上げていきます。選民思想や進化論もこれに繋がります。今日の政治理論、経済理論も全部この生き残り・サバイバルの考えに基づいて組み立てられています。経済不況、政治的混乱、こういうものからいかに生き残り、生きのびていくか、という生き残り

戦略が第一の課題になっている。脳死臓器移植という先端医療の場面でもそうです。生き残るものと死ぬものとが選別される。持続可能な開発の理論というのもそうではないでしょうか。開発される地域とそうでない地域が選別される。どこまで行っても生き残るものと捨てられる死別するものとが選り分けられる。「ノアの方舟物語」というのは現代における「タイタニック号の物語」なのです。救命ボートに乗る人間と犠牲の船に乗る人間。

そのおかげで日本も近代化に成功したということも先に申しました。原発の問題にしても、この生き残り戦略の究極の問題として考えることができます。

【三車火宅の物語】

これに対してもう一つの物語があります。これは仏教の世界で考えられた物語で、ノアの方舟とほぼ同時代に生まれた物語といつてもいいのですが、それを一つだけ紹介します。それは法華経という經典の中の譬喩品（ひゆほん）に出ている、「三車火宅」の物語であります。ノアの方舟は水の物語でありますが、それに対してこの法華経の物語は火の話です。今回の東北地方太平洋沖震災の災害現場と通じています。津波という水、原発という火。もう、三千年も昔の先人たちが、考え抜いていた問題だったのかもしれない。法華経という經典は日本人にとって最も好まれ、読まれた經典の一つだと思えます。今日の人は「三車火宅」と言ってもあまりピンとこないかもしれません。仏教的な教養、その伝統の中では非常に大きな意味をもつ物語でした。

その三車火宅の物語とは以下のような話です。ある長者（資産家）がおりました。彼は大邸宅を持っていました。その邸宅の中では長者の子どもたちが遊び戯れています。ところが気がつくと、大邸宅のあちらこちらから火の手が上がって燃え始め、どんどんそれが燃え盛っていきます。それにもかかわらず、子どもたちは全然それには気がつきません。長者は家が燃えているということをし、いくら声を大にして叫んでも彼らは気がつきません。それで、致し方なく長者は、その邸宅の門のところに三つのおもちゃを起きます。そのおもちゃが車なのです。羊の車、鹿の車、牛の車。これを金銀財宝で飾り立てて、門の前にずつと並べ、子どもたちに向かつて「あの門の前にある三つの車を見てみる」という。美しいあの車に乗ったり、遊んだりしてはどうか、と静かにいいます。そうすると、子どもたちは初めてその車を見て、我先にと外へと飛び出す。彼らが全部逃げ出したとこ

ろを見計らい、長者は今度は本物の大きな白い牛を連れてきて、その牛の車に全員を乗せて救出した、そういう話になっている。

我々の現実の世界というのは火宅だという見立てです。轟々と火が燃えています。ほとんどの人はそれを知りません。ほっておくと、その火宅と共に死に絶えてしまいます。しかし、そのことに気付かせて救出しようとするときには全員を救出する。こうした考え方にもとづいて三車火宅の物語がつけられていると思うのです。

しかし、現実の我々の社会というのが、本当は火宅無常なんだよということを言っている。この話の骨格というか思想は先ほどの、ノアの方舟の生き残りの物語とは性格を異にしています。死ぬときは皆一緒だ、と言う考えです。それに例外はない。人は100%死ぬわけですから。しかし、本当に生き残りたいのであるならば、全員で生き残る道を探すべきなのです。こういう思想を説いたのが法華経の三車火宅の話だと思ふのです。

私はこれまで仏教の研究をしてきました。譬喩品のことも知らないわけではなく、三車火宅の火宅とは我々の日常のことなのだと思ふはわかってはいたが、今回の大災害に直面いたしました。この譬喩品の物語がああ旧約聖書のノアの方舟物語とともに浮かんできました。これは人間の生きていく道を象徴的に指し示す物語なのだ、改めて思っていたのであります。

【紀元前の奇跡的な時代】

なるほど、今から二千年、三千年も前というのはすごい時代だったのだなと思ふ。人類の未来を見通したような、そういう物語がつけられた時代でした。そういえばこの時代、紀元前八百年ごろから紀元前後のこの時期というのは、特別な奇跡的な時代だったと言った哲学者がいます。ドイツ人の哲学者であるヤスパースですが、「軸の時代」であるといっています。最も基本的な、精神革命ともいべきベースとなる時代が、あの紀元前八百年から紀元前後にかけての千年の時代だったのだと言いました。

これは面白い見方です。例えばギリシャにおけるソクラテスやプラトン、インドにおける釈迦、中国に置ける老子と孔子、こういう人々を生み出した時代ですが、その彼らの考え方というの、その後の人類の二千年、三千年の歴史の中で起きるほとんど基本的な問題を考え抜いていました。人間とは何か、世界とは何か、ということ根源的に考え抜いた時代だったというわけですから、その後になつて発展した思想・哲学・芸術・宗教、これらはほとんど「軸の時代」の思想家や宗教家たちが言ったことに付け加えたり、少しコメントした程度のことすぎないという認識になります。さらに

現代の哲学者たちがやったこととなると、せいぜいその百分の一、千分の一の注釈をつけただけのもなんだということにもなる。これはこれとして、やつぱりすごい見方だと思いますね。

【日本人の二重性】

先ほど、被災地における被災者の方々の穏やかな表情について申しました。いったいなぜなのでしょう。穏やかな表情の背後に浮かぶ無常感といったような、そういう思想というか、信仰というものがあつたからではないでしょうか。それを遡っていくと、釈迦の考え方に辿り着くのも無理ありません。場合によっては今申し上げた法華経の三車火宅の物語にまで遡って考えることができるのかもしれない。だとすると、旧約聖書の冒頭に語られているノアの方舟の物語は、その後の西洋文明に影響を与えつづけた物語であるといふことが見えてきます。その結果どういふことが発生したのでしょうか。もしかすると、アメリカやスマトラ島沖やトルコにおいて被災した方々のあの激憤丸出しの表情に繋がっているのかもしれない、とそう考えてみました。

そもそも生き残りたい、生き残りたいと思ふが続いてきますと、それがいつかは打ち壊されるのではないかと、という極度の不安に陥ることもなる。生き残り戦略というものは文明を成らせる一方、その文明を維持するために生き残りたいという願望を加速させて、そのために反つて大いなる不安の中に人々を追い込んでしまふ。「生き残り」の文明というものは、人間を底なしの不安と緊張の中に追い込むような働きをするのではないかと、しだいに思ふようになりました。その不安を本当に鎮静させるものは一体なんなのでしょう。なだめすかして、落ち着かせるような考え方や思想は果たしてこの世にあるのでしょうか。私にとつて、それがアジアの地域に仏教を通して根付いた無常感ではないかと思つて居るのです。

ノアの方舟物語が生み出した「生き残り戦略」というものは、人間を不安の中に追いやるという働きをしてきたと思ふのです。もしもそうであるとするならば、この「無常戦略」というものはそういう不安の中に押し込まれた人間の心をむしる鎮静させる役割を果すのではないかと。そういう形で現代に再評価されてもいいような生き方であり、考え方なのではないかと考えるようになったのであります。

そうはいっても、我々は既にノアの方舟の物語に象徴される社会、国づくりから離れることができないのだから、その中で生きていくしかないわけですから、同時に私たちにはもう一つの「無常戦略」に育まれた心のDNAといたつたような価値観も、意識の中に流れていま

す。私は日本列島人はこの二重性によつて、今まで我慢強く生き抜いてくることができたのだと思つて居るのです。我々にしか具体化できなかった二つの戦略を受け入れる生き方です。これがこれから我々の方から世界に向けて発信していくべき、重要な特性ではないのかとさえ私は思つて居ます。そのことを、西洋文明のメディアも今気がついたのかもしれない。それを象徴するのが、災害地における多くの人々のあの穏やかな表情であり、冷静な態度であり、沈着な行動だったのです。それが、賞賛の的になつたわけですから。このようなことは、今回が初めてだったのではないのでしょうか。

今までの我々はグローバル化の市場主義、自由主義で来ました。絶対の基準は、つねにヨーロッパの側にあると思ひ込んできた。その前提の元に行動してきました。経済の分野においても、政治の分野においても。それがそうではないかもしれないということに、我々ではなく外国が気づく機縁になつたのかもしれない。これまでは例によつて、日本人の西洋崇拜ばかりが目立っていた。しかし今回、外から言われてはじめてそうではなかつたことに気がついたので。もうこんなことは次の若い世代には繰り返してほしくないと思ふのです。

【FUKUSHIMA FIFTY HERO】

それで、福島原発の問題になります。あの危機的状況が世界に知らされたとき、真つ先に、アメリカから次のようなメッセージが寄せられました。私はハッとしました。そのとき、メディアの紙面・画面に大きく躍つた文字がありました。「FUKUSHIMA FIFTY HERO」という言葉です。福島原発の現場には被害を食い止めるために、五十人の英雄的な仕事をしている作業員が働いている。命をかけて戦つている。その五十人をヒーローと賛えたメッセージでした。

そのメッセージを新聞で読んだり、テレビで見たりしているうちに、私はだんだん暗い気持ちになりました。それはなぜかと言いますと、その言葉の最後に「HERO」とあつたからです。彼らはなぜそう呼んだのでしょうか。それは、生き残り戦略からすれば、五十人の英雄たちよ、犠牲になつてもこの危機を食い止めてほしい、ということだったからであります。そういう願望の表明でもあつたわけですから「ヒーロー」だった。

そのようなことは、アングロサクソンなら当然のことと考えていたはずですが。何人か何十人の犠牲なしに、これだけの危機を食い止めることはできないと思つたに違いありません。このような考え方が千年、二千年の伝統の中で自

然と育まれてきた、生き残り戦略から導き出される判断であることはいままでもない。だから「HERO」と言うのです。今日あの現場で戦っている人々は五十人が百人、百五十人となつていられるかもしれません。本当にこれから犠牲が出るかもしれないという危機的な状況であります。

【全員撤退の無常戦略】

日本におけるメディアの表現を注意深く読んでいますと、「HERO」という言葉がほとんど使われていないことに気がつきます。朝日新聞でも、読売新聞でも、「HERO」という言葉を使わない、避けている。その表現が何となく犠牲のイメージとつながつて受け取られているからでしょう。そのような考え方の背後には、その仕事に従事している五十人には、できれば全員生還してほしい、そういう願望が強く働いているからです。しかしながらそれは保証し難いわけですから。このような考え方は我々のリーダーだけの問題ではなく、日本人全員がそういう考え方をしているからではないか。

これがもしも「無常戦略」で行くのならば、そこからどういふ選択肢が出てくるのでしょうか。あくまでこれは私の思考実験のひとつなのであります。もしも無常戦略ならば、そのような状況に対して、本当に命が失われるかもしれないというぎりぎりの場面に直面したときには、全員を撤退させるという選択があるはずですが。全員を撤退させるかわりに、放射能が溢れ出すことになつてしまふ。その放射能汚染という負荷は、日本国民全員が平等に引き受ける。あるいは世界が平等に引き受ける。そのような覚悟を示す選択です。しかしこのようなことはたして皆さんはできませんでしょうか。

ところがアングロサクソン文明では、このような場面ではまず犠牲になつてもらおうという覚悟を決めてかかると思ふます。つまり、イラク戦争やアフガン戦争を含めてそうだったし、そして今回はウサマ・ビン・ラディンを殺したではないですか。危機脱出のためには犠牲は必然、ということ。そういう思想の上に組み立てられた戦略を我々が受け入れるかどうかということ。もしもそれを拒否するならば、そのマイナスの負担は国民の負担と考える。これが無常戦略が示す着地点です。すでに火はこの地球上に燃え盛つており、我々の住んでいる社会はその火災に包まれている。とするならば、そのような運命とともに感受し、そのためにどのような手を打つのかを考えると、このことになりま

す。しかしながら我々にはその覚悟もない。

【なぜ東京に原発をつくらぬのか】

とはいいますが今度の福島原発の危機につ

いては、私は単にあれかこれか、という選択の問題ではないと思っています。原発を推進するにしろ、反対するにしろ、やっぱりその前に考えないといけないことがある、それが我々の欲望の問題です。我々の欲望それ自体、さらに人間の欲望というものを根本的にどう考えるのかということなのですが、このところをつきつめて考えておかなければ、推進も反対も本当のリアリティを持たないと私は考えています。それを、真正面から考えなければならぬときに、今来ているなと感じているわけです。

しかしさしあたって、あの福島原発の危機的な状況を国民としてどう受け止めるのかという問題があります。なぜ東京都内に原発を作らないのかということ、僕は十年も前からずっと言ってきたいます。受益者の負担と言う立場からすれば、東京にこそつくるべきではないか。核燃料再処理工場も東京につくるべきなのです。一千万以上の人間があつた場所に住んで、電力を使っているわけです。今度の福島原発の問題にしたって、あれは東京電力ではあるけれども、東北の地をつくった電力を東京の人たちのために提供しているわけです。この不平等をどうしたら良いのでしょうか。

沖繩問題だってそうです。日本の安全保障のためにその犠牲を沖繩だけに負担させていいのかということ。なぜ東京や関西が引き受けないのでしょうか。こういう問題が依然として残っているわけです。

【東北の軽視】

日本国民は私も含めて、正面からそれを議論しようとしません。

今度の三・一一の大災害が起きたときに、最初のあの災害の名称は「東北地方太平洋沖大震災」でした。これが時を経てだんだんに「東北関東大震災」となり、いつのまにか「東日本大震災」になってしまいました。いったい、誰がどこで、そのような方向を指示したのでしょうか。最後には内閣が決定したわけです。

この犯人はメディアです。メディアと政治が決定したのです。それでどのようなことが起こったのでしょうか。東北という重大な名称が抜け落ちてしまいました。私が岩手県出身だからこのようなことを言っているのだと勘違いされては困るのですが、実際に今回の地震と災害に直面したのは東北ですよ。福島原発は東北の心臓部に位置しているのです。それにもかかわらず、東北という名称を出さなくなりました。これは東北軽視の、東京一極集中の意識の反映以外の何物でもない。そのような意識が変わらない限り、復興だ、支援だということがいくら言っても、信用する気にはなれません。

この根本的な意識が変わらなければ、日本はダメになってしまう気がします。これからの日本は東京だけではやっていけないはず。いざれ関東に直下型地震が起きるようなことを考えますと、日本列島が「火宅」なのです。政治的な判断で、あるいはマスコミ的な判断で「東日本」にしてしまったというこの重大性を指摘したいのです。外国からしたら東日本の中心は東京です。その国際感覚の欠如ということは、太平洋沖という言葉を脱落させたことにも如実に現れています。

今度の大地震、大津波が発生したときに真っ先に新聞に躍った解説は北米プレート、太平洋プレートが重なり合い、そこでマグマが爆発したという説明です。北米、アメリカ、環太平洋はほとんど地球上の全国々を含む。チリ大地震も日本に大きな影響を与えました。今度の日本列島を襲った大地震というのは、地球上のあらゆる国々に関係する大災害だ、ということを外国的に、国際的にアピールする絶好のチャンスだったわけです。なぜその太平洋を削り取ってしまったのでしょうか。そのかわりに登場してきたマスコミのキーワードが「日米同盟」という言葉でした。アメリカの海兵隊が支援のために日本にやってきました。そして、「ともだち作戦」でした。もつと大切なことがあつたはず。日本という国の、この政治感覚というのは、情けないかぎりです。

これは、花巻出身者の歯ざしりのようなものかも知れませんが、なんとも納得がいきません。

【グスコープドリの伝記】

そこで、先ほどの福島原発の問題にも一度立ち返ってみようと思います。例の『FUKUSHIMA FIREFTY HERO』の問題で、私が密かに思いついたのが宮沢賢治のことです。私のふるさとの詩人である賢治の晩年の大作に、「グスコープドリの伝記」という作品があります。これはほとんど賢治自身の人生を要約したような自伝的な小説になっています。

主人公のグスコープドリと妹のネリが、両親に死に別れて街に出て行くところから物語が始まります。ときは地震、津波、飢饉によって疲弊していた時代。賢治が生まれたときにあの昭和の三陸津波が起きました。そういう時代を背景に物語が展開していきます。グスコープドリはネリと生き別れ、一人で農場に入つて米の栽培をします。これに失敗し、やがて工場に入つて『テグス』を生産します。しかしこれもうまくいかず、やがて彼はクーボー大博士という科学者のもとにいき、科学という技術によってこの世の中を救わなければならないと考えました。飢饉、日照り、冷害の状況から農民たち

のくらしを救わなければならない、それで科学の力でこの災難を打開しようとした。クーボー大博士の指導のもとで、冷害の原因だった天候を変えるために火山島に渡り、その火山を爆発させるという計画を立てます。その爆発をさせるために、最後にその島に渡つてスイッチを押す人間は犠牲にならなければなりません。そのスイッチを押す人間に「私がなりましょう」といつて、グスコープドリが島に渡つてスイッチを押すわけです。そうすると火山が爆発し、気温が上昇し、冷害が収まりました。

これは宮沢賢治の願望だったと思います。当時、彼はいろんなエッセイの中で「今の時代の科学は冷たい」「宗教は暗い」「芸術は勢いが無い」ということを繰り返して言っています。それらの状況を変えて世の中を救い、新しい社会を作り上げなければならぬと繰り返して言っています。科学と芸術と宗教が手を結び、その中で結果として誰かが犠牲にならなければならない。そのような思想に賢治は取り付かれています。それがグスコープドリの伝記という物語の主題です。

【人間という生き物のジレンマ】

ところが、一方で宮沢賢治といえば多くの人が引用する言葉があります。それは「農民芸術概論綱要」という作品の中で、あるいは「生徒諸君に寄せる」という詩の中で言っている言葉です。

「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」

このメッセージが実に多くの人々の心を捉えています。賢治といえば「雨ニモマケズ」と、この言葉だと思えます。さて、もしもそうであるならば、ここでいわれている『個人』はグスコープドリの個人と同じことなのでしょう。しかしこの問題では、グスコープドリは個人が犠牲にならなければ世界の幸福はありえないと考え、実際に物語では彼は犠牲になつていきます。そういう点でこのメッセージは矛盾を含んでいるのではないのでしょうか。しかしながら、まさにこの矛盾した二つのメッセージの間で生き抜いていこうとしたのが、じつは賢治という人間の一生だったような気がします。彼は、単純な理想信者ではありませんでした。人間とは何か、ということを考え続け、そのジレンマに苦しみ続けた人間でありました。生き物を食べずには生きていけないというのが人間の悲しい運命です。これは賢治の主題でした。

『よだかの星』なんかもそうです。口の大きな醜い顔をした『よだか』は空を飛んでも口が大きいからいろんな虫を食べてしまいます。虫が口の

中に入り込み、虫たちが命を失うことで自分は生きています。ついに彼は口を閉じて虫を食べず、ずつと昇天していき、輝ける星になりました。このような物語が、賢治童話にはたくさんあります。これを犠牲と見るか、新たな再生と見るかということはいろんな解釈があると思えます。そういうことを彼はもつと現実的にみつめ、ものを考えていたと思うのです。

【雨ニモマケズ】

今度の東北地方の大震災に対して「雨ニモマケズ」という言葉が、繰り返していろんなメディアを通して紹介されました。石巻の北上川の河口にあつた大川中学校では、多くの児童が犠牲になりました。その瓦礫の跡から教室に貼つていた教材の跡が見つかりました。そこには「雨ニモマケズ」ということが書いてありました。それは、非常に象徴的な映像でした。

アメリカのワシントンDCの連邦議会のすぐそばにある、国立ワシントン大聖堂で追悼式が行われました。このときに、英文の「雨ニモマケズ」が朗読されました。私はその大聖堂に行つたことがあります。そこは大統領が新しく就任したときに記念の演説をするところでありました。大統領は亡くなると、そこで葬儀が行われます。レーガンのときもそうでした。今度の新大統領が就任したときも、聖書の上に手を置くだけではなく、その大聖堂にいつて演説を行いました。海外からくる国賓や宗教家や政治家が、そこに行つて記念の講演を行います。

我々はアメリカが政教分離の国だといつていますが、あれは初代の大統領ワシントンが発議をして、国には教会が必要だということと建設したのです。アメリカ建国の最初の百年間はそれに反対する勢力があり、なかなか実現しませんでした。が建国後百年経つてあの大聖堂がつけられました。政教分離はその通りであるけれども、建国の精神はきつちりとキリスト教でできている、それがアメリカです。そのアメリカの国立大聖堂で、今回日本で犠牲になつた人々を追悼するための儀式が行われました。そこで宮沢賢治の「雨ニモマケズ」が英文で朗読されたのです。これには感銘を新たにしました。

【賀川豊彦】

実はあの大聖堂には、日本人の一人が銅像にして祀られているのです。世界中の偉人たちが、政治家たちの銅像が祀られていますけれども、たった一人日本人がいます。それが「賀川豊彦」です。賀川豊彦は敗戦後世界で最も知られた日本人でした。しかし戦後になって日本人は、賀川豊彦のことを忘れ去つてしまいました。今度の追悼式

を報道する中で、一つぐらい賀川豊彦の問題に言及するメディアがあつてもよかつたのになと思うのですが、それは残念ながらありませんでした。

【我々に与えられた大きな課題】

「雨ニモマケズ」が朗読されたということを今申しましたが、そこで賢治は最後になんと言っているのかというと、「デクノボウ」といいたいと思います。この『デクノボウ』とは一体なんなのでしょう。この詩の中で、なぜ彼はそんなものになりたい、と言っているのでしょうか。

時間がないので詳しいことは申し上げられません。あれは私の場合、十字架にかかったキリストや、仏教における菩薩、そういうものと比較して考えていました。またそのように考える人が多くなりました。私もそう思っていました。しかしその考えがだんだん変わってきました。気がつく、生き物を殺さずして、一日も生きていくことのできない人間の運命を考え続けている賢治の姿が大きく浮かび上がってきたのです。そして、ついに人間であることを止めたい、と賢治は思うようになったのではないのでしょうか。

ジレンマの中で苦しんでいた賢治の、最後に辿り着こうとした吐息のような告白が、あの言葉に表現されているのではないかと、そう思うようになったのです。それは世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない、といながら、しかし誰かが犠牲にならなければならないというのがこの現実です。そのジレンマの中で生きていた賢治が、あの病の床の中で最後に紡ぎ出した言葉が「雨ニモマケズ」である。そして最後に「デクノボウ」という生き方だった。

これは、大変辛いことです。宮沢賢治という人間が最後に人間嫌いになつてこの世を去つたと思う。そしてそれがもしも本当であるとすると、とても辛い。彼は法華経という経典を世界の人に配つて読んでもらうようにしたい、という遺言をお父さんにしました。その情熱、宗教心は熱いものがあつたと思えますけれども、しかし先ほど述べたジレンマからは逃げられなかつたのです。もしかすると、これが現代の日本人に突きつけられた重大な課題かもしれません。あるいは日本人だけではなく、世界の人々に課せられた大きな課題なのではないのでしょうか。

「生き残り戦略」でいくのか、「無常戦略」でいくのか、あるいは両方に両足を置いて第三の道を見つげ出していくのか。これがこれから我々に与えられた大きな課題ではないのかと思えます。